



『OECC技術部会が展開するラオスSATOビレッジ構想』 ラオスの里山から学ぶ教訓と明日への活力

八千代エンジニアリング(株)
取締役 国際事業本部 副本部長 (OECC 技術部会長) 小宮 雅 嗣

《メッセージ SATOYAMA》

“里山”この心地の良い言葉は、今、ラオス北部のシンクワン県ドンカム村で定着しつつある。近年、世界中の里山が危機にさらされており、日本政府はSATOYAMAイニシアティブ(自然資源の最大限活用による自然共生型環境社会)を提唱し、世界各国にその重要性を呼び掛けている。OECC技術部会が展開している“ラオス SATO ビレッジ構想”(本プロジェクト)は、同イニシアティブを推進する独自事業で、農業改良と環境保全を組み合わせたパイロットプロジェクトである。技術部会は新しい地球環境貢献策の一つとして、豊かな自然と人間社会との共生モデルを、世界に向けてメッセージ発信している。

《不発弾の故郷》

本プロジェクトは、2010年に行われた名古屋COP10生物多様性フェアで企画が公表された。その後一般公募で提案を募り、日本とラオスの専門家による審査を経て、ラオス国立大学農学部の『シンクワン県山村の住民参加型による持続可能な農業改良・自然資源管理プロジェクト』が採択され、2011年6月から事業を開始している。

プロジェクト対象地シンクワン県ドンカム村は、ベトナム国境近くに位置し、日本の田園風景“里山”を思わせる500m程度の低山に囲まれた盆

地である。その一見平和な地域は、実はベトナム戦争当時、米軍による大量のクラスター爆弾が投下された歴史がある。爆弾はラオス全国で2億6000万発も投下され、その3割が不発弾となった。シンクワン県は最も激しい爆撃地で、市街地だけでなく世界遺産登録候補地ジャール平原に至るまで。不発弾が残り深刻な問題となっている。そのため同県の開発は、ラオス政府の重要課題となっている。

《生活再建と損失する自然環境》

ラオスの人々は、戦争終結後、不発弾処理に悩みながらも山を切り開き農村生活を始めた。ドンカム村も例外ではなく、生活を取り戻すため。収穫を急ぐ村民は丘陵一帯で大規模なトウモロコシ栽培を行った。その結果、森林面積は急激に減少し、土壌流出や収穫量減少をもたらした。また家畜の病死、乾季の降雨不足で農作業ができないなど不安定な生活環境となっている。

先進国の里山は、地方人口の減少や高齢化などのために放棄・劣化する例が少なくない。しかしながら、里山の損失が一旦発生すると、様々な生態系サービスも同時に劣化し深刻な影響が発生し、更には貧困、生活や文化にも直接的・間接的に影響を及ぼす。そのため、先進国が経験した経済開発の負の側面を教訓にしつつ、ドンカム村の



計画対象地ドンカム村



トウモロコシ畑と土壌流失

様な環境復元ポテンシャルが高い地域において SATO ビレッジ構想を展開し、自然共生社会の構築を図る必要がある。

《SATO ビレッジ構想の実施》

本プロジェクトでは、計画地の生活状況、土地利用形態などから、土壌流出防止のための等高線植栽、家畜・家禽のためのサイレージ肥料飼育とワクチン接種、乾季の耕作能力向上のための水車の製作の4つのコンポーネントについて、現地住民参加による P L A (Participatory Learning and Action: 参加型学習行動法) 手法を取り入れて、住民教育を行いながら実施している。実施に当たっては、シンクワン県の行政統治機構の考え方に合致させつつ、ラオス国立大学が中心になって県と郡と村が連携協力している。(下記の図表参照)

《SATOYAMA の再認識》

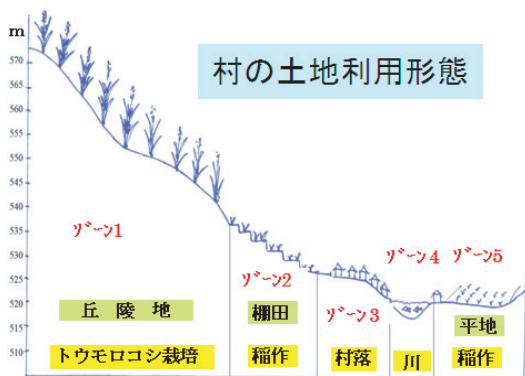
技術部会では、昨年 11 月に中間調査を実施し、下記の通り本プロジェクトが SATOYAMA イニシアティブの 5 つの視点に合致しており、また村民が故郷の SATOYAMA の価値に気づき始めていることを確認した。本年 3 月には終了時評価を実施するが、自然共生型環境社会への理解が更に深まっていることが期待される。

【SATOYAMA イニシアティブの 5 つの視点】

- ①プロジェクト実施者、村民、関係機関など多様な参加主体が協働している。
- ②現状以上の森林伐採をせず、化学肥料を用いない環境容量内での活動が行われている。
- ③等高線植物・稲ワラ等の自然資源をサイレージ作りに循環利用している。
- ④水車の建設・利用、機織り等の地域の伝統技術伝承の価値・重要性を認識している。
- ⑤村民が自発的に活動を継続し、生産性・品質向上効果として社会経済へ貢献している。

《価値観の共有、そして明日への活力》

OECC 技術部会は、モニタリング調査を若手育成の機会として捉え、海外経験の少ない若手技術者の参加を企画した。参加した方々は、ラオスの人々への自然共生を気づかせる活動を通じて、自らもまた新たな環境保全への視点を見出している。その新鮮な感動と経験は、日本・ラオス双方のプロジェクト参加者で共有されており、お互いに郷里の SATOYAMA を思う心が醸成されている。



ドンカム村の土地利用の現況・課題・改良活動

	ゾーン1	ゾーン2	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン5
土地利用の現況	丘陵地 トウモロコシ栽培	段々畑 雨季稲作 テラス式	起伏ある低地 村落居住地、 家畜・家禽飼育	河川(雨季に 水面6m程上昇) 魚類生息地	平地 雨季稲作
課題	雨季土壌流出 農産増加 養分不足 栽培ブーム 連作障害による 収穫量減少	不十分な 降雨貯水	家畜・家禽飼育 家畜の病気 雨季放牧面積と 牧草の不足 冬季飼料不足	河川環境汚染 (海水流入)による 魚類生息環境 悪化に伴う漁獲 量減少	冬季の水不足 稲作地の冬季 休耕
本プロジェクトによる 対策と 農業への 応用	等高線状土壌 流出防止技術 NSV 家畜用牧 草植栽 トウモロコシ 栽培のための 有機肥料	稲作の教育	家畜家禽の 飼育方法・ ワクチン教育 サイレージ保存 飼料による飼育	水車利用 による灌漑 耕作地活用	冬季(乾季) の野菜栽培 トウガラシ 米の2期作 マングラビウム

ドンカム村の土地利用形態と SATO ビレッジ構想の活動



参照：OECC H.P. <http://www.oecc.or.jp/contents/research.html>